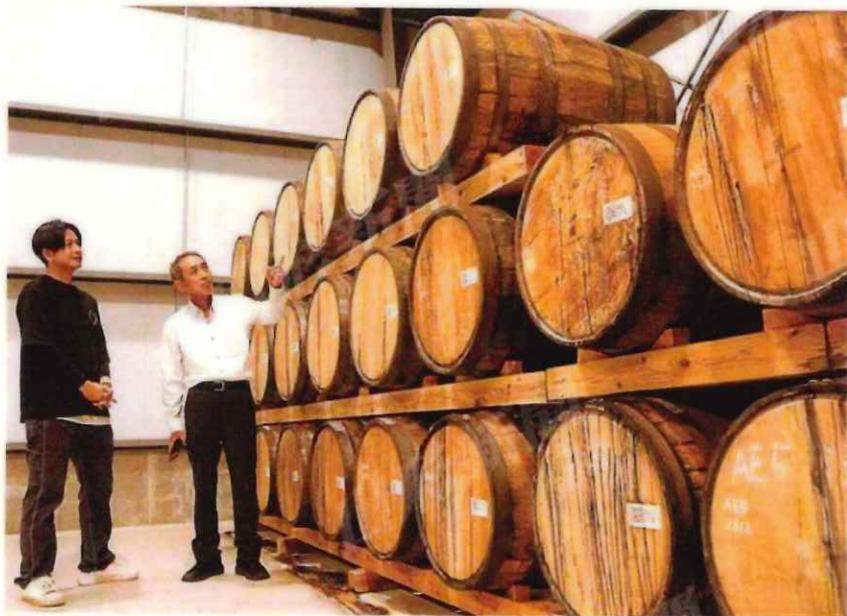


特注家具製造などのエコー（酒田市、児玉健一社長）は、県産のミズナラ材などを使ったウイスキー樽のリメイク事業を始めた。自社の木材加工の技術と地元材料を生かし、将来的には修理の請負や、海外輸出も視野に入れる。遊佐町の月光川蒸留所では既にこの樽を使った熟成が始まっており、数年後には味わえるようになる見込み。

# ウイスキー樽 県産材で再生

エコーが製造するのは、使用済みバーボン樽の「ふた」となる鏡板として、自社で加工したミズナラの板をはめ込んだもの。主にホワイトオーク製の樽を米国から輸入し、鏡板部分にミズナラ材を組み合わせることで、複雑で豊かな香りが生まれることが期待される。

ウイスキーの熟成が進むエコー製の樽を見詰める児玉健一社長（右）と塚形直記営業部長 遊佐町・月光川蒸留所



対応できた。ミズナラは、木材市場ではナラ材として他の種類と一緒に流通しているため、生産段階から分けてもらい調達した。

23年には月光川蒸留所（遊佐町、佐藤淳平社長）に納入し、熟成を開始した。同社の塚形直記営業部長（42）は「ミズナラ特有の滑らかさや複雑な香りが出始めている」と話す。数年後の販売に向けて現在25樽で熟成を進めており、今年はさらに50樽の追加を予定している。エコーでは、樽全体の修理など、対応する分

## エコー（酒田）が新規事業

### 家具製造技術生かし

### 修理、海外輸出も視野

児玉社長（66）は、自社の木製品の海外輸出を計画し、本県の素材を活用することで「他にはない

物ができる」とウイスキー樽に着目した。県内や周辺地域にミズナラ材が豊富にあるだけでなく、本体と鏡板の隙間でパッキンの役割を果たすガマの葉は、ラムサール条約登録湿地の大山上池・下

池（鶴岡市）周辺で良質な物が確保できた。鏡板からの液漏れを防ぐ蜜ろうは、朝日町の蜜ろうそく工房「ハチ蜜の森キャンドル」（安藤竜一代表）の製品を活用した。

2021年から研究を

開始し、県工業技術センターなどからも支援を受けた。中古樽は約200個が入り、鏡板の直径は55センチ程度。乾燥状況によって大きさは微妙に異なるが、自社の精密加工技術を生かすことで対

（阿久津誠）

©山形新聞社 無断での転載、改変、複製、頒布を禁止します